823
.M8N2

岷江入楚

蘭

30

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

藤袴

卅七歳　太政大臣

尚侍御文使なりけり

玉鬘忍々祖母服又夕霧宰相中将も祖母服なり

夕霧は中将宰相のよし　而て宮ふる又三条の大宮の世

給へるよしいつはしとおもしろく見えて侍りて殿下の御ふ御とも

これ月にはぬ世の中へき残花いろ〳〵よ御しかりけり

十三日ははつ〳〵へむ世たまひへきよしとも見ゆるへき君の八月

にうんは服をぬきのかわりをいへり　祖母は五ヶ月の服なり

まゐ八月まてを加そ小雨に月に三条文八かりねの子なし

宰相中将為源氏御使参玉鬘中御門給なり

八月十三日玉鬘着除服なり

宰相中将揃参宮年玉鬘来

宰相中将条殿御前中玉鬘乃返なり給なり　此次此捐給なり十七丁

十月可有入内之由なり

柏木以中将為内大臣御使条西第なり

九月和哥ハ忌人逢競申事
ハ忌申常に不申ゆへ件給ふ

蘭

注 以詞并 前為巻名但須ふハらふの心とあり
師 巻名おなし野の露ふ思つうし藤袴あハれハかけよかことハかりも
注 源氏七の八月のことありみ賢の巻なり
秘 源氏七八月九月のことし拘給ニハ三月より五ケ月のこ事ハ忌人也

内侍ハ気御ゑつ人の事　師 初条以前に尚侍にかへられたる氏
おとゝ文はのことハまうしあつましけれハかとてをしうり
注 玉鬘なつきまつ尚侍に任せられて後に入内ハするにやおもひ返さるゝ
玉かつらハ内侍のかミにせらるゝ行幸まてに粧ひ済アリ五ケ月の事ハ内
侍のかミに任ぜらるなるべし　玉鬘内侍のかミに任せらるゝ例ハ古今あまた見えたり
あきらかなるしのふこといかならん　秘 源氏と内大臣とも
おやとおもひきこゆる　秘 玉鬘ハ心中也
義字実ハ父なからぬるをいへり　秘 源氏の心のうけのふをいへり
心より外にたえんなき　注 常ハ内侍にまいりをもしろかるゝ事も
あくいひてたんとし　さんかうさハ多よりなとなり
秘 自然常ハ藤なにしあるる中将ハはつハとし
中宮女御とも　秋好と弘徽殿とも
まうちハうくものけあるさ　私 為中なとわくを思ひ出でらるゝ
私云源氏ハ父のことくし給ひ内大臣又実ハ父なれともへたてなく

うちはへく色させおんやなりとれなく身もおちつかぬやうなるを云也
いたることもなくふひとつ也　先源氏内大臣の御ん比ふらしろ
給といつとしいはる〻御もなりしとく
女月く親王にまゐりく又御なく女御なとにんをまゐらせ
てまつりてはとし　字いまつて年云の宮も人しらぬこと
私云此義代はいるまへこ〻にも素まる時に也御語をも為といはまる
やうとしめまた御にもうつに又内大臣も女御なにんまいらせ
なとやうにもつて此んとはいつまかもとうふ也

うけひまかんと　うケイ　秘 呪詛のんくこうにてはあるあし海子字
字何しれとそよむんて
先 呪詛のんくと言ふにてはそもまくはなり直うぬんく源氏盛をも御けし
何 一 水原抄素く一けひは人のうらしくらふんく
呪詛日本紀比んなる又日本紀に誓をうけひとよまりそれも誓
云の義もいは誓ふをうけひくにはあつさる也
なれは人に誓くことくまうさいりにあいんとうけひつるのこと

見もなき代んちうふ也　私の義給へし
御おかりしまゐらし比　むらつ此年齢にておあるなとしとうもし
ありとてうの御ありさまを　先 源の給ふうの御まあしさるよりては送
秘 宮仕になるころよりあしさるにてはなりしとく
私云此まし源のうたにはとるよりなり
このおとくのれんくん　何 意見ニ口ハ八日本紀おとくは源し
いる給はつくふにとりて離をて人のをしへるへきみるにて也
見はむらうの宮を源氏のとくはを紀給まいりこと人の也へるうき
んきよくも　むらつ此ん宴るよをあつへはさんとも
内をおちておとしも　源のんうけ給へこと内大臣のをしはかり
給ゆへにより御にてえさりかりらくし給はさりし
うちんりてうりえおらけきやきに給へこと　何 請 日本紀 諂請 佞見
まる内大臣のそうつる方へよれとり給ふるも源へうつりて先給送
私云うけつりはより御に理運にすんくし争をやきさは御にさ
えをれてすゝんそし

ねとてもかくても　是ハおほふにハへる何に合てらる人し入内ありて
其云あり帝の莚を八中宮女御の中へをさなかへしかゝて八
又深の心け給りて又此身こ此心をさりのふ人のきるをとてもかく
てもとらかし但是秦く為

けしき　同 懸し　私云此句おほふに深まる思案ニ付ケ丁あまる
の中ふかりつゝふるし人の本意ニなかぬ心し

中くはおもやゝろ子　某父内大臣ちかる中をあつかしのいふハ
むかつて八深の心かり　もなく好色の道をあつかり給しおほむ
此子の心ニて見かし故人めをはくかり給しともしらく人深とハ
此おもりもたゞかれをも深し此のふ心紀
いつまでも　秘 深内大臣し
まおもやと云ハ深と内大臣二人なれハいとまつしきさし
こゝろし給へる道　むかつての歌し
うきてさ世ひ其の此り　同 藤純良 祖母須し　うへ寄花開し

秘 三条の大臣かくれ侍りての後　玉くしけの忍ひは服の色にて染
ていひおこせ侍りける　をりは紅葉を見てよめり
秘 三条大臣なやみ給ふ時おもふに見えてのちはもみち給ふとハ
見てよめり三月廿日と藤裏葉に見えてよりし三月なるへし今玉
くし此祖母の服をき給へり　兼大臣同く
義曰三月より八月まて外祖母服六ケ月也　令式例七月
私云見自筆也
宰相中将おなしき人のいまする事ある也なり
秘 夕暮衆服昇進のうちあふくみてよめり紅葉を宗の思ひ此歌
にて昇進也なるへし
む 夕暮此宰相中将ニなり給ふ事あふに地てみてよめりこれ
外祖母の服をき給へり但服土云純年猪熊藤原兼輔卿也
す夕暮ハ外孫なれとも或る書肯の服給句文のこゝろをと云給行なり
同 こまやかに例の濃染めしこて染さし此よそこふにひて服ならん
そうりおもりハこゝろ人さき
紅見渉海さと　父のこゝろし憚服への心の浅深なく　夕暮ハ六尺にも也

の際あまふよりて光の君のことなり
えまれぬる　河 巻纓 老懸の紙なり
秘 根者の老緌するハ冠のをりをかくんなり
折より扇まゐらせて　秘 是ハ夕顔とむかへとめるあいさつひくし
秘 むかへ実の見身よしをいひさしせ給ふ夕顔に紙とめ
つゝかへれとくしめへるし
いはあつさりけりとて　河 夕顔はまどハさおもといひていけり
家るよしていひしかしらんもなさけなきやうなる心なり
秘 今さらにおうとくしくきりおもふこともいふこととし
殿の御せうそこにくはしけりおかせる
秘 内よりもり夕顔を御使として源へ下さ参らしきをもやうて
むかへの御ふミ下給し　河 蔵人所の内のこと
内より御作を源のむかへへ夕顔しての給せこゝへ夕さりの
おりしたる扇にりきり
秘 むかへ出の源への返事なり
御人り

にほひまゐらせあし　秘 むかへをく夕顔に給ひしこと　弄
河 銘西方紫野一弟八の老にも人説のことをとなり
うらてあやうきに　秘 実子ふさりてハけりむかしくらく
あらくおりひ給ひしる
すみ身とおひしかハんにハうりなつあまきこしるにおもかしとこ
そくあきらかくれちハ扇のわかぬんをひて
すタさりと見身なりぬる
秘 扇もあかぬとハ夕顔ハ秘身もあかぬんほくとこ
秘 私云うらてあなすちとハ夕顔むと見身とあるしる　　總
作て見ゆるぬよしをすあきらめてハ夕顔もおなかを
いふなるへし
このまにほんをあるとおしも　是ハ源の心中を夕顔ハ往言して
あふしあくいハ本ハほんのるをかかふにつひなれとし
すみ源のむかへを家はに見忠なむし給ひとらふに紀性ふ御銘
なとよりいるをおふにの真子なつハいよくとく夕顔ハ安家記
秘 弄 されりれ秘ある　弄 源氏とむかへとのるも

花 むらさきの忍は入内なれハかるくハあらんとれをかくあるへきなり
秘 帝とよりは此の思ひなるへしとて思ひあるとも是源氏
とむらさきのゆかりとも
おなしきさ胸なる　秘 中宮女御は紫の上の御ゆかり源氏は外戚
あなかしこむすめにこそ　夕霧は心の中に何とやらんいらんかりし
ま おなしき野の露にやつるゝとハ帝へむらさきのゆかり給ふとも
みせましき源の思ひとも何事にも一出給ひんと夕霧は思ふ也
つきなくすくよかなる　夕霧はつきなく実なしさ胸しく
侍りきとの給ふなり
へふさふんましと　花 是ハ源氏の心をつくあるまし人のさま給ふ
わかくせと侍るよし夕霧の給ふなり
秘 夕霧はつくりたることくの給ふなり
それせりとことを　花 源氏の心をもてもかすかに
ところとハいふなり
まめやかに　何 子細

うへの御けしきの　ま 夕霧はらくちぬりかんさしまふに侍り
ふかきそれのかかりそのうへ御ハ冷泉のみんみかとハ其の御心
わらいあれしなと源の御の御心ハいひなれなり
秘 まへふ人ハかきんましきと侍らつる事は子細を列人ハあると
いへ給へんかも　むらさきのいかんことなき也
秘 えまかしく　ま 夕霧の心なり
御ふくもこの月ハ　ま 夕霧詞
花 此月八八月も祖母の服八大宮月なれハ大宮のうせの月八月めのる歟
秘 むらさきの物乃給ふ言のいひのま自らしくくいひけ給ひ也
八月も三月廿日大宮の御忌月也八月廿日ますて 惶很の日なり
花 同小八月とかへは法し　私義書花ふ小三月廿日とらう帝り
十三日　秘 点かし
かはらへいてさせ　何 む河原解除 除服ハ積るし
あくひ給へん　これよりむらさきの詞夕霧は大宮ハ母
の祖母なりむらさきのあるみ小ハ思ふ事なれハ思かあるへくやうらす
同し猶さ小ハいうとれあるよし

秘
むかしの詞なり　　私案しかへし給ひけんとハかへつて同しく
あはれなるへき程ならく夕霧もいつくあるハとくしらくなれたと
いまさらて源の七女と人のあやしなふにたらふさ雨なるん用捨なるへしやら
ては次の詞ならくなれへし　　孝 祖母も父母のゆくに付て裡服
の月数あるあれハむかしを夕霧と同し程に服をぬさき給ハ
んハいかゝといふ所紀み夕霧ハ大宮の外孫しむかしハ源の御女のつ
ゆて一しも葵上の御服なる故ハ大宮とハ他人なるへし　仍源の子
とへにおほんきんとのむかしの月数のんれ

このみくなとの　　河 労 水原抄　　花 いまそて源氏の御女のよし申そ
河 ふみ三条宮の御服をなとゝいふ人の河しぬさまふらり
なきんるをたくり給ふし籍ありハんあくぬなれたるんとし
上臈志きんすぬ河へからへし　　御楽(ヨリテ)く籍あるの上臈し
き許しらくし紀をしらく紀ともいつる同るすなり
秘 今内大臣宮子のるすハ此三条宮の御服をあるふよりて人
河まるこ新人をしらさありとハ意恵をかへつて地労のみし

いつまてか此後むかしの許をかかへくさるし
とうさしとつきませ　　河 三条宮の御服をむかしの意えりしさ
さ雨きんにあまねくきへそしとをむけるるも宰相中将
るこえなれハぬさきてんたゆも拘らにを思ひ給ふ心し紀
花 大宮ハ夕霧此しておふもうたえふそまし雨たるゆへなり
秘 中将ハ思ひろ紀りのごとし　　孝 依り所
痛をうに今ハ形見の藤衣あることも袖をふくあらしうる
此活勢なり　　以上呼ハ此所

げてもあやしう　　正 内大臣此御女あつハ源氏意ハ何とてみゆく
ゑなれぬ庭うにさまふそとんならて思ひのふし夕立の着
をいまさく夕霧ハさり給りぬれなるへし
花 夕霧此源氏のむかしをとしつきをとあまするをいはし源
忽ぞとも志てさ雨し
秘 見付うとをうへハ許ハなくて裡服ハをるし　やうにきこゆるなれ

きるもとくは衣なくてハとくし

こゝろあらハ衣の　ゐは秘母の喪服なくてハ残せ

のおもくのすくもみゆるましきと云流布のすなハ喪有喪服也

なふとも忘ひらぬ　秘　むつの返答

又袖きんもはれになれなれハましていつきんさへもとし

かふ猪あらうま　あさ何とハ抱のそれさへみゆるもんとハ袖んしま

まちひらんとする雨まてもへらぬんし　衣字ハ一向ふ用ふす

かく何流ハ喪ふとく　又袖のよれはいくともふし

らふのその

ゐ　さつものなとありは袋むところぬる字を総

君ふハいつきとそふのと用らし古今抱君の下ふ見へたり

ゐ　ほらふとける一本ハらんハ抱君ふらすとよむなりみ本

さつかとあり此袋し

一本　問らんとよむつる也　一答抱君此時ハらふとよみ見君は

らんとつかへさる也　但これかりよふへし

秘　らん表つくの後ふ表乃拾遺恵帯抱君らんひと始ハよめる

あらかひと後ふあつかひあらり総君のなりひふうぬる字を

ハふみ字ゆるくと何となきし　とふのまくひなり

これとはらんさへさ　一本　服衣の後ふやこのふとも見すれ袈袋

友恵なとと君のかりと袋兄恵字と見るるみとれをいへり

秘　袋ハ数あまこあり袋兄恵字とつかうありみ字はる也

秘これ袋のゆりといつる也　私云袋友恵秋芝冬藤と

いつりは一種〜と袋ハ散る何とり訓それ服衣の喪衣の

ることふきり也さる也おハさるへし

さるふものはらく　又袖のは袋とまりしもとゆるる也

らかふへふ忘ひもよめらて　らる人とやてと云ふしらちつけ因縁

忘思見家集　ま何ハ涙神しとらゆるくふふ後うかりふかきんとやらし

精蛉日記うつろへふ秋のふへとうろまかかふふハ何くるまかなり

藐姑射刀自抽緒ふらつらえふれこて後ハいかてのいいるかんえそ
ゆるふて今案らんつらえふとい大約らんつらえひふといつるんを
いつしよしやうふよる人へこと
秘　らつらえふ抄して八我つこおらふなとしいふんとし一向ふめの人は破
色の時のらつらえみめんハらつ極ふと云義あり　いつも然ハ両
ふ出るもたけきしてそら捨へるし河海説也
まらつらえふ八一向ふといつふ初し松の色を破色の時は八河なふ河つ
られめつき独れよう　是ハらつ極ふなと云と
夕霧
御独をひきとりし　むかしの独を夕霧の一らこ後し
おなし　野ゑ露ふ風つ河し荻露ありれハうはよかつとはりも
河　おなし野ゑ露ふ風川やとハ玉簪く夕霧花ふ根母の根ふ
風つまてるんし
玉　ゆめしう風荻衣ふよらへう河し
葉こうふくハ荻衣の人いりとも風かまとつおるく上句三条家
の御説を用しやうふ見後つるといふなり

秘　蒸ら風ハ荻の人ありかともハ折言云しまくれん八出る斗と云んと
みちのそてなけ　かことりりけといへ古代ふの初ふけて八色宵
森　奇れん両ハ折言ふよ下くくハすうしハありんとよろるなり
ありんといつる人ふ夕霧れく後ふなり
匂ふ螢　むさし野ハ独ひ川りけしかとも葉ハうすとひふさ
　　　　むさし野ハ独ひ川りけしかとも葉ハうすとひふさ
しぬる人の露なくハ花紫やるとなりあし
と葉よるけきの人と八武蔵野をとり古れんハむらつて花夕
霧とき枝のゆりなてよるけさ程へなつハ紫の色を染申
こらら後へ安ふよるけさ中ふそても河紀極ふか川へてきうハそ
後りしとも螢の色ひの人しら古れんく色くおもて給
あらしてらもいつ古とし下れ初ふ人をふても申ゆるより添
まれハいうしといつるらく奇の人いつてへ侍るなり
秘　此奇ふ為れ民も両月花むかつ夕霧ハ此極まても見えと云れ
ん同独と云つき極も句よとくよるけさ中ふても句紀極ふか
風さらうなりしとつひのれこるとくみの衣ハ玉簪と夕霧よみ中

おは猶君これハ女君ニハあらてみやすところよりけるふみをみえすれとみえすとて宮ニ
へとつたへさせ給ひけれハかへりこと宗はしのゆかりハおもへしと也
文ハいとこなるゆへなり

花
此哥の心ハむらさきと女房と御君ちなるをおもふにつけ
といへり落葉といふ事ハ実ニハいとこにあらねとみえ宮を落つゆかり
なれハ落葉といへり哥の心ハ宮の御事ハゆかりあれは
はるけき文もゆかりし落葉ハ女君ニ猶ちていとこなる君

秘
かとハかたちの心ハはかなくも文を寄よしとの事あり

よのつてきこゆ　孟　みえたてつの事両なとかとハかりもかの人
とらてつかとかまそのけれとあふ事より御心ゆへハいととむ
うへのおかせん泥のおふなり
すらうちらひく　女房の物なり
秘　女房の御心むらさきの心ニと両なかハ又
ゆきはゆふつきも
らんとれのひまつりうしいて両離きつる中ニてハなかと
花
むらさきの心ニと両なるハあらんとれ後ひまつりうしま

まへなりこにハいとこうしけれとも
花
此君ハ御かたの心をかすの事や　式部卿の宮と中務なと
みえりそあなれハ女宮とふ心の事や式部の宮ニハ女御と宮を母としたて
まつりし御りん人なる君しみえりそめて見えるはかなくおもと
えたへ先待ちぬ
秘
なりかゆかくからハ中ゆくうちとえ御りん物をとこあつれとも
こ川先ねとくちひの心かきと両といへるかなり
とそうこおもし

何
御宿むきハいとこおもし離皃なるをこたくしてもありんとそあふ
秘
前ニハかとくいひ夜ニハつや云むまきの君おつてしてもありんといへるなり
此中将の宗しきハ　云　楠木ハむかしをおとしいてもおもてん心をけ
しるよし女房ハおとしいとあひて宗しきかむ　かすまいひもせきり
しつして内大臣の御女とすのしさて御のんをしわかつきし
中くかれ君ハおのひき両して　楠木ハ見ゑ女とかりてしつ好色の
ことハうちとききかうしくやむつりん事を嫉しく　おなかれ持し
ありれとかふ　女房の心中をあかれとかふにおそりや世なと猶く
くらへつさなれと　秘
御君の御心

のうへ

かんの君やう／＼いり　秘 御てんの君といへり内侍のかみなり
弄 内侍になり給ふ事は朱雀院にかく御あそひの君なるへし
同 私云次の段に此文体をさふらふにといへりいまさ尚侍になり
給はぬにや 俗文なり 給ふかれともさふらふなるにや尚侍に叙給
ふは朱雀院にてかく／＼御あそひのためなるへし
私云此姫の親式部卿にあり気色なし 并又むかしは後
にも入内して文体は給ひて後星夢なりし尚侍にておはせし
んは此所に宗しきさら
秘 夕霧は正給ふ
夕霧はまんの実しきは此給へし和らんみをとうむきに
いりもく給はぬまゝは　秘 奥人ひさいり給ふ
あちのひぬ　ゆふさりなり
申くしと　秘 夕霧は本給ふ
これはおまうし　秘 紫上なり
参 腹はこれあした同時に紫上を見てつりし事も
御まへにまいり　秘 源の北の方なり

いとく給ひて　孝 源のとこ海へおもく夕霧にあひのふさし
れへりなと　秘 むかしより此所にてとやさ海し
このえ体をさふらふにして　秘 源の朝し
弄 むかしこれ今申にはえつくへをさふらふにもさひ給はすらん
くあてのふなりへし　私云さふらふは混乱雑混のん
文なとのまんし給へる　河 系　系申へし
弄 まんしは草紙々好文に源系し給へし
秘 まんしは念比文源系し　私云草々文好文に源氏させる人
にえ体をなして此の所にて今にはえつくへをさふらふにも之を
源の推量なり候まゝと似本此時まとを見給ひてはさておく
とむかしは此所給ふまゝはりて離れてはむかしなとさ海へ此あら
候てもへさ海は　なむかしを女御に成にあり給ひてよかくんやまさ
たへなとにてやよくおかしまへさいつまかつらのへかと
夕霧は源氏に身つかさされるゝく
弄 玉かつらの人さ海はいかにもなし給て似合給へんとと御宗さの
ゆかしさに夕霧の源氏にかゝのかし

秘 又号れ丸壺といつ所にして御方へまうてとも
いらしきなおもひ　秘 中宮弘徽殿をよみたるハ有かくされたるとも
まやハいと猶んほ　是御つく　みとふるまひさてある人
さ候ふてもなけきしハむすちたまひんもいひとも
あきたんさうん　是 まさとなつめ更衣人あるふ是ハ宮のおかふ
と申たん給ひ源氏の兄弟れ申ふてうらやし給ひんとも
さるなれかひふてハ　秘 源と是ハ宮ともなふて川さん
うつれ申ととさうしもおりうちて先けふれのすのとこと
あるしや　又源の御　秘 源の近衛雑家なるすとこと 是
まらんひとれ　秘 まる宮子ふてもなけこと
大将さんとれとして　秘 撰集なり
あけ君の実父内大臣よりも源をとらしむるとれのうへ
つ源とれなりさ程　秘 又これなりさるるもけふあれて
金剛ふ子つきなと東宮のやうふりして後ハ後悔なりとこと
かの母君の　むすめのるすし まちれ上のるを源の給ハおほき

此後ハさもあれてすきとつる出して御のつて御所さくしくことつら
れとも巣くすんとかけ源すれとりつくり名白以上のるすとあ給
ひあもて御しかのそく君のあかれかふかひおこしけよる新子のやう
にえつるかつそ人つくのこらんともすつて無やふ御かし源すの君
らうしこさうすとも更衣源なりてもつてさらすしとれのなふ抱
さてむつてか人への恨ともふ口給る方ふさつつ取れりしそうら
か らうしとの給ふつしてふつ行るすとの給ふて
かのかとくりさ　秘 文父むとくの行とり給へさ枝もなくこと
むつうの実父内大臣のつう
らふ相のりすとして　源のむつうとりてくやし給中へ実父
内大臣も人見えつし給たるとの給ふありう
給さくしく　れ行りるすなるもかきうくいつり
人のらい更衣の源人へかうく　何むつうの君弟の実め更をひてのうは
む 若宮御集の少すなさしいつくやまりりやへきてとこと 是
秘 こつ実ハ若すつれ家宝ふて二ツとそうり
せ 若ふ又末うりのむつうくの人へさ母と申しも末なり於源の実否

里ずみしける　おぼろけの御ことはりにてあるべきを
まつりごとはいとよく　秘 靡然してその事に
あはれなるかたにはなくしなして　実 おほかたはあるべきことは
こゝろぐるしきことにもおぼしさかしきかたなり
なをこの御すゝめにしたがひ　尤もその御かたなり
あはれなることなり　それは　実 夕霧の御かたなり
秘 夕霧の源氏のいそぎたまふとて申さるゝなり
中将もかくてこそ　秘 夕霧の御ことなり
ほんさいしとおぼしめさるゝ　秘 源氏の御かたよりはなれたまはぬ事を
かのおほとゝも　秘 内大臣　秘
大殿のほかにさぶらふのみなるに　秘 紫式部
秘 大殿の御事を申す　それは父なり　あはれ大臣の宮に
実 抜萃　内大臣の御かたになりとて中宮の御かたへ
やがて近衛大将にならせ給ふなりけり
うちうちにひさし　秘 源氏のさしてうつりける御心ざし
大殿はなにとてかはうちつゝまれ

秘
実父の御後見にてさらにかくまいらせんとし　未だ
むかしより内大臣の申さるゝ事を源氏に夕霧の申されし事
秘云此段は今の儀也　秘 夕霧の源氏へし
女は三にしたがふ道ありて
従夫夫死従子礼記アリ　秘　何 三従　婦人従人者也幼従父嫁
兄嫁則従夫々死従子注云従謂順其教令　礼記婦人従人者也幼則従父
儀礼云　婦人有三従之義無専用之道故未嫁従父既嫁従
夫々死従子故父者子之天也夫者妻之天也　して葉女子
は幼時は父にしたがふといへどもすでにしかれば源氏は
御心のままにかなはん三従のはたしそれはたんべしと内大臣の御心
として源氏をうちはなたれしといへども内大臣のおぼしめしより
此段はなかなか心えがたし三従の義なれば源氏も実父なれば
それにしたがひて夕霧も父ありて実父の御心に源氏を何かは
次第にしたがひぬべしとの御心にてあるべしといふ御けしきなり
私云此段は源氏の義也

はつくをあへてさめの心に悔きたるハ
師 従者をあへてと次第とハ幼嫁花河によりて人に志さうふし
秘 今ハ内大臣の事にして志てふかへられその次第をあへてハをかしの
ましにいひとましとのかとは源のこゝろにかなふて
抄 是ハ源のむかつりと実る事なきる事をんふこゝ先てかのかふて
に内大臣のをしいりれほく実る事にいかハあかりゆきハよるまて
にしてをんするよしなれともさもなきるよしなれハ今ハ実又次第に
てよろへしとかのかの御し　秘抄 出木の義を従へき説

うちくにも　抄 み夕霧れ初し　秘 是ハ源氏のうちくにとも
むく人先あまこみにはよりてむかへの恋をとりたてゝ柚(?)し
給ふる事ハさほりにてまくつてうにに風にゆく付文つゝ人
せさせんとし給ひしと内大臣のうしろ志にて給を夕霧の縁の
拾 うちにもとハ源氏の六条院の内にもれたるとせるへうちを
はなれるし式部うちくにありとも同しかるへし

秘 内大臣の心にて思し上るに外の心てくとせる人うちにお肩さるゝし
私云此段花鳥の義従へしみうちへととハ内大臣の内く
にてかくれたるへきの給ふといふなるへし
風をとなりにまさしれ　是明石上なとく
捨ってうに　此段花鳥の義従へし　方にある
おかれもうれるへ源人　秘 くまつ人にあしさて給ふ事ハむかへの
下心をハさしこ先てかし給もとに内大臣方にハの給ふなり
らうろう
師 宰相し勅をハ宰相にこ先はをハ夢にこむるなりさて此人
おしこめる御事しみ人の自由なるわるをもらうろうと云　師 宰相
その心にハいかゝぬとし
拾 宰相も勅をこめたるをくれてみ下の心をおしたて御難之事
にてハ此義あけへり式なるせん是みて給く
秘 宰相も方を従にいま勅を宰に入る源をもしとく
私云とかくいれまつへとハ尚侍たれ對禁中に伺候せし先
なる儀に玉つかれ云もとくもみへるよみ女御更衣なとの

極小必竈をとらんへきにそてなしいかとりてむさハ尚侍
になしまて里京にをゆて源のまうりのにせんとしさ
まふさの内大臣方よ性亡し宇縣のんて能おけつ紀
あしらへしと有る　源のみく心覚おもうしあふと内大臣の心子となり
よろしひ申され　孟 夫実ハ様志末に批を成平よろしひの字なり 私紀さ
私云よろしひの字ニ不有り

いとらかりしさき海に　夕霧れらうしさき海し
宗小さハむねの心し　抄 源の心とす
さやうにておしハかりんと源もおもいりなり
ゆかしきし　源の詞　河 但云 な 源の心をみ給へて
秘 曲し正忠にならてとく　孟 曲んて批定し
いうりわれれんなうひ　秘 内大臣の心なうひとし
世なるにんをさうんなり　孟同
あらハなるらになるらん　伏標のことゆるむあなんしとの給ひ
わりひら卿なしや　な 御のうれしあつましさんく

河後撰 いかすに立くれつて見よらくおりふくまなれ人のなりけり
秘 うなの所りなし　孟 昔ふひなれとなり
九 思ひくらはいうぬすなれ也人の心ふとうふんし　私云此義不被紀
みよきんにハおくまあるにハなしと源の給ふ詞紀
河 宗しきハけさやかなれと　秘 夕霧れんなり
源のロさうやにけうわれとも尚さうらしく夕霧れ思ふとし
おとしもさうりや　源の心とされハよろしき思ふ人ん心のうらん也
人撰童するにとん中にありひおもて
あんにあ川なる中て　人の撰童のとくむかつしと宴るになとみ
てつと為んなりて源のおわしてし人の撰童にかゝる事を東小蔵方とらへ
猶ち宗老まくまし

あの様ともにいそくんさよ紀　内大臣へ源の心さよ紀さ御を知へんなし
けにあらうへのすらわくけさやかなるまし
むかつしにぬしなけし実か給てこそんさよ紀を御もかゝつ
あつ人にむ立給いて任の心ちめも給ましさもち根を内大臣の

なかめつゝ涼のかはおもて給しくなるより給へるとなるへし
おもふ大臣のまほしと宗にて侍り
あしこくも　秘 人ハおそろしくなるよりとくし
むくつけく　花 おそろしきこと
れふかくなとぬる　秘 八月なり
月あくハ　秘 九月ハいむ月なれはなるへし　云
十月(かみなつき)くもり　花 忌よく
うちみもふりともなく　秘 酒小ハうちあへならし給てかとも同しふ
よりいそきさ給へるなり
すの給ふへことハあかれもしく　秘 なかはこなたの大将なるへし
たよりのよすかく　河 従月水紀 資月 使
王くらの宗きうへらちなるものつらふるよすかくともし
よしれく濁を　花 川舎河海にあり
河 よくさきへてよしれく濁ハせ紀川ともへの心ハいかくしとそまかふ月
おめくいふふ　みつらふるへて此心なるへし
中将も中くなするうちまもく　秘 夕霧しおもふかしるへし

たゝみすし　秘 夕霧のこと也
みなすかりてなきわかれり　これまて夕霧此るをいふ也
まとれにもあらふらハ　柏木のこと玉つる此実の兄もハ源の此
おもふりなれハ夕霧のそらふかへまいりらつねしれくなん
りとなくそなりけれしいつり
以中将んをたのも　柏木なり
うちつけなるらん
とれつらひあく　兄弟とすこて柏木此縁にみなと縁つうとい也
なほ残りていくを　秘 内大臣より此ハ侍にて柏木兵衛督つるや
すは柏とつまらぬ兄弟の畑むされよしあしハなれなり酒と　秘 以中将ハ実兄弟なれとはまこと無くなきし
おやうふひときこゆ
月のあつれ秋につのけにくまてく　河 月中有河々水上有桂樹高百丈下有一人斫樹姓呉名剛父西河人也年十六(六十イ)得仙長生兼名苑　家苦架小
あなれとなれともちてさら月のつのほふくれて
今案は拾のけハまことも月の浪なるへし

孟
北月梅庭の梢乃木なり　庭の梢乃木なりへしとも
見さし入庭くも　秘　えんし此ハ庭にて給ふ今ハさしなきし
まお代人にて首尾しあちらし時ハ中りくあかりをとるよりか
ハきりしし今ハ見え子とありある人ハちらくしきこえし
ら川らきこえん　む攀の柄木に直にりの給りん秋つまし給し
宰相君しらく　兼むらつれ子に行りし　女房し
秘　行かつ物人て夕良上のいとこ有りき
なかしきんうひく　秘　柄木の詞し
らつらた楓を桜にも侍らねと　柄木は早下きて此のゆ角し
あんぬたといひ　秘　見え子るし　すき同
いは見え子るとして勘為君女し為見え子又經來り同乐皆寄子由
こあいのるり　秘　此つしらぬ有りけるし
あのしとおりへり　ちりと集具しら抄紀
たふどし此のつより　秘　むらつのゐるり
まむの詞なり見え子なららとくしらぐくとつるまはのつより
おへ中らけ給らいやとおへともとし

まくあらくこらぬ給ふも中くらとしな　こ見つ小時儀あらんハ
云男むさかくこそあれ見え子なれハんやむくあいさつ物のよし
秘　らくれのんハらつらく座うてかまりしこうとし
なやましくおかさるらむ　秘　又柄木の詞
おりくけふきこえさするも　經りとりも却ねんなら紀
来よりくりさしなしと山根あるり柄し
いと先やとし　柄木の折の詮へきとなり
まつり給んると　秘　いつ此まつり給へきそとし
内荷よりれのゝ詞しいつ此入内れるしともあ　小夫り給ねとし
らつくふれ給りんなん　内と小て命に夫つを給へとし
なふるりも人めに　秘　内大臣ハ何とも人めをくらり給ふとし
まよ給つ源へまゐ世年りてとしれきらしむよしにあるひし
えをはんりとなにようののゝふと柏のくり給ふて
いとやさと角しき　秋柄木の頃しおふ数ありとむくらん
おくりしるをいひあるなり
いつ般にいつけくも　秘　以中物へ見え子といひみくりしきる

おハしましてみなこと参りつゝせしむるさまかしこし

まつハこよひなるの　秘 風ふきてなくさめくへ参りぬ人を扱させ

さきすてむさ小ゆかしうらひまふをうしみたる事也

水をすてうつりに　御 少雨酒し此事也　雨を晴の事とする也

秘 御との事なり

思たらしそめき御しく　秘 宰相おなしこと此扱ふて給へ侍ると

後しつけまし女房なとに少雨御つくりあまりひなしなと梢随

ありけん人なとやらの　御 下は

かくなんとしこゆ　御 柏木此後ふき御を女房此むつましく

きふ人さしを　秘 つまり御まを御せ申しさま是れを成すみて御通し

御 源氏の御事にむらつのとうしなたる兄弟るとく御にむつひ

給りんならたけおるやに御つかんと人さしをくらりて 草

雨なりほ心しをすくしくしられまさし

まハ揺くてまるりけるしこそ見えて　玉ろつの法をせさせて此あて人柏木

の今すらしやさんと思ひつる心中をまさゆきておもひしるなり

むそれいとるとハおもひふるまひの心中にうつりしてゆつくれぬる心

あくまらに　秘 忌つく

いまいせ山のつ来にるとハあらしまてにさうえの名しいかに年ひたる

御 柏木の君ろつをせうとすて志して心を御りしるなるを

まよひぬるとよめり　兄弟有事をさくてこれ揺ハかくもまよふ

忌ふよ世ふるけりしお義なし　綿緑揺心ハ奥別にを海よ

ひたるあと云より洞小けなく高河より古小なく恵梅流の枠

秘 いりせハ兄弟とハへり兄弟とも志してみなと参りせしるまし

おろしの揺ふハひなしくえまよふと云恋小よ世あるまし

あまよひたるよと云より洞小年なくなるし　古今に

なの心の雑おもひて山ろのとうにあひえんるをれとそ

といへる后両二門をまめる此御なるへし　御 日

御 いせとハ日本紀に妹兄とかきりいもうとせうととし伊勢宿

伊勢男君兄弟まあねとなりありしより米婦をハまやと云し

此中独む揺をも日本ハ兄弟此名をハ志して然し流まといふ紀

後撰云 ちりかゝりたちはれ中に何ゝすゝ侍りけん 清人〈志ゝ〉
足ともれいせの山も秋ちれハおゝつりぬるりの小にたりける
ちりかゝれ中にいかなるすゝ侍りけん此なりぬ樹にもあれ清人〈示〉
むかしま志きいせの山のなりにたに風つ川ある家の時まさみそ
いりせの山とハ紀伊國いせの山そのふとして吉野川風そもよとそ
万葉七 背の山に直に向へるいもの山ことゆるせやもうちはしわたす
みえ六 あかなんちまくなひらかれの流くりこへいせの山しるされん思
みちのくのしのふの摺くされなんみゝく嫡まかまさんまと云 為推
葉くを代奇し 光孝天皇
春日野く若菜のすりおもふのちつれをきり志らまさん
是ハ河原左大臣の志のふもちすりの事をとくとして結とし
是を代奇を光孝小用例し業平とん哉〈ほ〉 五十六 河原左大臣
此年 六十二 寛平十七年八月十五日薨七十三 嵯峨天皇皇子
よるとうむすも人目りなるん なむ 菅家の手むけまかひきたるハ
秘むふ哉ゝのるし人目りなるぬるまといへり

九 秘むにつはつきのうたへもみちふしといつるなり 両説

延喜九年 まにまにとハ心にまかせてといふ儀也 たゝしくそあれはかりそ
玉くしけのふたまかせといふよミに天子をつけむとかきれくまかなるらむ
みおもしと侍れり
秘 なふ小用ともまかせむりしとなり
まうほ神のハし 私 神ものゝしいきくまかせつり
紅葉もよりなるや 私 ちはれむるのにちむかなもをかせて紅葉
ほ小つふおし
菅家の此ひてふほなり
私 源氏のゝんおもふをほかに兄弟れをとゝにもなの神のなそ説
あのうらうくれとも 今よりハのふみなりくねくもやくなうもし
なうと王う川らるゝの宮
秘 菅家の立しうく昧達もちくハ有る川きしそうなるとなり
一 字実の兄弟なれハ生てわれりむ説にかくれ有る川きしもと
よ王なり后 秘 梅華の初たなし
何 伍吉とは月ハつくとも川なりほす前〈まきれ前おふと云なり
国ようくはつとも 何 渉労 漸く功労を流すんとなり

秘　年去の労なり

あくえんりとく　　河 恪勤　年去まる事し見も故又ゆきりは

声を〳〵まる而けり　　蔡 宰 鎧 縁　恪勤なとし

孟 我身をとりて尾らく字ゆる説　間恪勤と申らん

一説年去まる人を〳〵ふ今も力有かくこなうと常ふいふ

いてうと所　比相承も人折に雅し夕きりなとかく云く容仮とて

くきしらうを名と云し

大将ハこの中将　大臣大将大臣中将騎馬右大将相承次中将

らうか云右大将蔡京にまさあて女をいむとお国まて女とよ

こゝの中なられとおんなにハ中将し給ハくあて云ふすゝめ云守

事我おりハ千ふた大将殿の中将比ねつきの中将なりきる帯

いとよくかくうし給てしのふりんともふ物給て相ひなど殿

千葉騎馬の大将も相承の中将と共ゝ右のつきなり

人くもいとよく　　大将おいてり

あさなる所を　　河 あさちの事し

なりとかハあらんと　　孟 西行比んしみをとしハ比騎馬をむこふて

て縫人ともかりになり

ふれおとくの　　秘 源なり

まるやうある事ふくして　　秘 源のゆきし給ふこそと内大臣比龍相とも

孟 源の玉つゝふゆりけ給へくと内大臣比らふなめ

これ大将ハ　　孟 騎馬の系図をとけり

あきやの女御　　河 兼香殿女御　　長ゝやの母女御

私云長ゝ女ハ後ふ今上なり

おとうち我　　源内大臣ふつきて比おれことと騎馬

兵部卿宮のおかいつ云　　河 大つ云嬉女のゆ紀只とも大夜紀華

胡従ハ多我閑化大つ云閑化今昔とし集ふてあり

孟 おかいつ云ハ嬉めし　　騎馬の比少身ハ兵部卿宮の嬉めし

秘 比系のよ比只身なり

これよ川ゝこ乃もと　　騎馬の新比少身ハ兵部卿宮の嬉めく

おもなとつ而て　　河 媼　老媼心し清お納言まつて第子すさ雨

しき把去ハ是比月秋おもなのけそう

孟 おもう女ハ老女とし云なく

ミは御ふより六條のおほとく
兄おとし此宗てハいとくと深めかひ給へるなり
秘 髭黒よのおほ殿大将のか笠なれハ
兵めしくおきられさる所なれ 髭黒のさ海宮へし此人なるへし
か
此おとしも
女ハ宮川人徳 秘 玉かつらの人れ中し宮つ人ハ拘付小おの月へし
しうりとより方給し 秘 髭黒の内との者より北の宮給へハ
内大臣ハ有まし東半の按ふハの給ひみむらてふハ宮つ人
おすのしけなるときくていよくんいつきあるとなり
ますく大とよの 秘 深く
海とのおや乃 内大臣ハ人內く同んなつへし
これ年のおりと 秘 此人右大将ふあつかし
む
むかつの女房廷なり髭黒ハ此年の房をとらひ給ふし
尭 女房し王ろつれまふなり
ナカツキ
九月ふて 尭
ゆらしろとも 髭黒のつくひするへてお云
秘 八月なるへし 髭黒の文乃詞
松ゐのこおしも

秘 此義いつく九月の末なるへし未の詞ふ九月まつりと有ふ十月
ふなつハ入内あるへきらしさふらくも九月とまうくり
髭黒
かきそへ
ふさつハいとひをせまし去月ふ成をかとおきなかなき
秘 家君ぬなつハ九月つ人のいむ月なれハいとふつさと此月まうれ
内へまりぬへきかふいをある月をもきらうて一らふいさたき
河 九月とハ世俗ふ綴ら死みむ聞すふ奉のゆくなとるされ
とも様なつねりなれハいと久しとりて十月ふハ内まつりと定
かし年れハ九月つ小命おらゆよし
月まつてとある 秘 十月小内へまつり給ふをよくま給なるへし
いふひなれ世ハ 秘 宮つ人ふむかる
式部卿宮の御詞也
蛍兵部卿宮
胡月まて先をまて王さし此宮みの言は宗ふ所をあつなん
秘 蛍宮ハ兵部卿なりと給へ消やまれ方なるをよくふらひ給へとく
みの宮ハ内ふまつひ給つ天新小かれくまし給はれつさし
きれハ新自宮ま先をとそてもとハいつりまむをかつ逢しふ宮有
おハ忘れ給そとよく 此義可然く

天子へまゐりかよひ給ふ事もしけゝれと志らぬ給ふなるへし
玉さくれ紫なるにおほけゝる白露のいまゝて世をへん哉なゝくに
て紫む藤のうへの霜ハ朔日の光ゝにはきゆへき也なりとそのま
とくなるを見めにてあれハ消をねかはむにハらひのへとこそ
藤の花ふをとく霜よりぬかゝるゆひちよそひちまさるら
私云秘の義給へしみゝけ哉なしすまにハゆ哉あり
いとかし本をすかけすあれの　むさくれ紫のトをれなるし
秘 藤をいつる事にゆかりなるへし　河二 悴 樵悴
れつひきんうちあひき給ふし　弥 読思の御使と弟のこと也の
使とかあひなし　すまし
秘 西方れゝ使のかはひなるへし　九條円　私云法おほ此義にや
まれ御いとゝ紫ゝにハ好香の文風流をもてふく給ふへし
さしれハかし本之縁むむ藤に霜の文之御に御みを流け給へり
それをかとさ流りて文筆あるハ御使も紫の文のゝんに御心ゆへ
し縁といへりゝるかはひさまいやと弟子地に掛り
るしれゝつひのかはひきのとこゝる義ニ本のなるし不審さ

紹巴本て直ふお法をしくは此義おもしろく八ゐ栗なりとも此義可然
先師くつ説也し
郭公これやのたゝ鶯猜　秘 是も玉くしにんけしる人へと尋ねて
神てたゝ鶯猜の傍をうけよ
とのうへの御返りか猜　此本上の見分とらふく
九条本猜 ままきなんと云ふも拙のなし　きつ紙ハいとゞ御ふして いとさますふなん
河海 ままきぬをとくゐられと忘られすいとゞ御ふしていとさますふきん
秘 東く西白き帝他　此義孝寄を源川なれをなり
河 昨ぬとて今ハのんつてかつふなしといひはつねおもひそふ経千年
私云此帝をおもりいふ
おほしたつぬへくかへるを　秘 内へまゐり給ふハやつの車々紀くへ
ぬへましい月を后おほりなるへくと云へ　すまし
河 河うこなうこの御ゆゑとも何をも玉くつの忘何ともお用したら
て返り世れなるおもくらくしくさといふし
私云秘の義法へし
こ紙りく日くけふむくふあへふひらふ紙おく霜おとのましくハくけ

秘
若宮の名なりつる以下師説
注 此哥此心ハ日頃ハ君にあはぬ時にありて葵ハ心もて日にむかふ
ものなれと錦をく露をハ家とハ思ひさためかたし玉かつらの君
にうかれ給ふ人の身ハ心にもあらぬなりゆくかれてハなけん
とかうたちまつへとけなんきつしもまちまてならぬといふなんし
秘 きつれの行つなんといふをうけたり葵ハ必日にむかふ物なり衛
足をて身をたもちうへかりのなりされと日にむかふとて露
をハえけたぬまゝくれされとく玉かつらの君にもかゝるを哥
心うなるゝみつてつなきこしへまちせなりをいへり
抄 葵ハの日心向日も露をおのれとハ常さらとく玉かつらの身
おもはゝはいつれうつへとし
河 傾心比葵藿　朝夕奉堯曦　百詠　蘘荷依陰時藿向陽
緑葵含露　白薤負霜　清安仁閑居賦
葵ハ日にむかひて葉をかたふけて根をかくすものなり
孔子曰鮑荘子之智不及能衛其足葵向日傾葉蔽其根
河イ本 鮑子為府使則足被留孔子聞曰――前ニアリ　文集第十三

花 衛足ノ葵ハ二葉ニアラスこと
こゝハ何つれおもしろき人也
秘 歌かれ心からかくハなきとかう給ふ文ハ嬉しくこのみし
露つりなき也ハ
花 若宮の名此心中し
おんなのれなひ人ハ
注 女の心ハさしあたく名にハなひきのふらん
とおもしくさらちハ思ふ給へ渡となり
抄 玉かつらを女のほんと定めてもふとき紫上ハ又花上也中くいふ
かきとをはさらへし紫の給にかけてかあへし
秘 これ天然なんかし
花為いつ玉かつら此君へをほんかれつことくせ紫上紅梅のやうにて
紫のハ玉かつらを女の心にはまつさしといふ人く紫の給ハ紫は
ゆかしくかえてうりおもしくうちハ源氏と内大臣かく